

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	柳 東益
論文担当者	主査 垣淵 正男
	副査 都築 建三
	副査 金澤 伸雄
学位論文名	History and Determinant of Adult Neourethral Stricture After Hypospadias Repair in Childhood A Single Center Study Derived From a Single Procedure by a Single Surgeon (小児尿道下裂術後の成人期形成尿道狭窄発生の頻度、時期および要因についての検討)
論文審査の結果の要旨	
<p>本研究は、小児期に尿道下裂修復術を受けた患者において、成人後に発症する形成尿道狭窄 (Hypospadias-Associated Urethral Stricture: 以下 HAUS) の発生率、発症時期、および発症要因を、手術方法や術者が統一された条件下で解析した初めての報告である。</p> <p>尿道下裂は陰茎および尿道の先天異常であり、多くの患者が幼少期に包皮などを用いて新たな尿道を形成する手術を受けるが、小児病院などでは18歳前後に通院が終了することが多く、成人期の HAUS の病態や原因は十分に解明されていなかった。</p> <p>当院は、同一の尿道下裂患者を小児期の形成手術から成人期の尿道狭窄まで治療していることから、1973年から1998年にかけて単一術者が単一の二次的手術を施行し、2011年から2023年の間に形成尿道狭窄で来院した患者の解析が行われた。</p> <p>母集団723名中14名(1.9%)がHAUSのために来院し、小児期の形成尿道に対する再手術は7名(50%)が受けておりHAUS発症の唯一のリスク因子であった(P=0.0003, Cox hazard モデル多変量解析)。HAUS発症率は小児期再手術を受けた患者群では6.8%で、受けなかった群の1.1%より有意に高い結果であった(P=0.0001, カイ二乗検定)。HAUSの発生頻度は低く、30歳代後半ごろから出現する傾向が明らかとなった。また、小児期における初回手術の成功が長期的な形成尿道の開存維持に重要であること、HAUSは成人期に症状が発症する比較的まれな病態であり患者教育が重要であることが示唆された。</p> <p>本研究は尿道下裂に対する手術に関する他の施設では得られない貴重なデータを収集、解析して、本疾患の治療法の進歩に大いに寄与する内容であり、学位授与に値すると評価した。</p>	